The Real Face

取材・文／山田涼子　撮影／石川奈都子

「探偵」というジョーカーを使って しあわせな夢を紡ぐ映画づくりを

林 海象

HAYASHI KAIZO

探偵映画を撮りたくて ド素人のまま映画界へ

今なお愛して止まない母校の立命館大学を中退後、映像制作会社を立ち上げた林海象監督に、現場経験がゼロだったことは有名な話である。「どこに行けば現場に入れるかすら分からないから、つくるしかなかった」とは、大いに頷ける言。「だから、僕は一度もカチンコを打ったことがないんですよ」。映画をつくるプロたちの世界があることは知っていても、そこへの入り方は誰も教えてくれず、当然カチンコの打ち方も知らずにスタートしてしまった。「あの音は好きだし、映画を撮ってる感じがしていいと思うけど、編集中に映像に入っているのがどうもね…」と苦笑。すべてイチから手探りで進んできた監督だからこその感覚か。はじめての映画制作時などは、「ハサミと虫眼鏡とセロテープでフィルムを繋いだ」というから驚きだ。「効果音ですら『どうやって入れるの？』という感じで、友だちと音をつくってダビングしてつくり上げた」処女作は、白黒の無声映画。自身がずぶの素人だったことから、カメラや大道具といった、脇を固めるスタッフはプロに頼んだ。そのツテは？「シナリオがちょっとだけ面白かったんですよ。当時、白黒で映画を撮るなんてなかったから、やってみたいってカメラマンがいて、まぁ、みんな巻き込まれたんでしょうね（笑）」。

推理小説の謎解きよりも キャラを愛した少年時代

大好きだった小説は「少年探偵団」。好きな探偵は、明智小五郎に、フィリップ・マーロウ、スペンサー。共通しているのは、推理がないこと。アリバイや密室やダイイング・メッセージよりも林少年を魅了したのは探偵そのものだった。その証拠に、彼が描く物語に登場する探偵は「キャラ立ち」した人物ばかり。そして、意外と問題は解決しないまま終わる。今回の新作「THE CODE／暗号」を含む「探偵事務所5」シリーズでは現在、37人の探偵が活躍しているが、それぞれにユニークで愛おしいワモノ揃いだ。

作中の舞台である「探偵事務所5」は、川崎にある創立60周年を迎える格式ある探偵事務所。5を先頭とする3ケタの番号で互いを認識しあう100人の探偵が所属している。今回の主役は、暗号解読の天才である探偵507（尾上菊之助）。数々の暗号を解読してきた507でさえ、初めて目にする暗号を解くため上海へ渡り、命をかけた任務に身を委ねることになる。本作中、現在までに制作されたシリーズに登場する多くの探偵が集結しているのも見どころのひとつ。どのキャラも魅力的だからこそ、あえて問う。「それぞれに思い入れがあって、全員好き。あえて言えば、北村一輝くんの551かな」という答えは、監督自身が卒業した、実在する探偵を養成する学校での番号が551だったことから。100人もの人物設定を考えるのはさぞ骨が折れるだろう、と思いきや、「撮影前は脚本部の企画

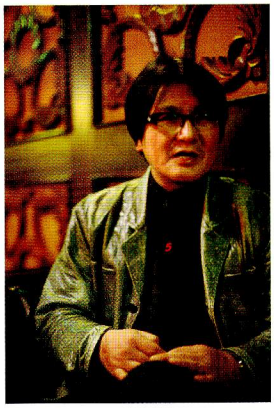
会議が週に1回あって、アイデアを持ち寄っていたから、まだ使ってないキャラがいっぱいあって…」と、今後が楽しみになる打ち明け話。

リアルを追求するからこそ そこには寓話が生まれる

今作のテーマは、タイトル通り「暗号」。もちろん、暗号を解読するシーンがいくつも登場する。転置式暗号、音階暗号、書籍暗号、RSA暗号といった新旧の暗号、実はどれも実物、というか本物だというから恐れ入る。なんでも、「暗号事典」の著者である吉田一彦氏と友清理士氏に指導・講習を依頼し、マニアが見ても納得の暗号を採用しているのだとか。劇中で使われる第二次大戦中にドイツ軍が使用したことでも知られる機械式暗号機「エニグマ」（タイプライターのような文字キーを押す度に、別の文字に変換されるローターとプラグボードにより生み出される天文学的数字の変換規則で暗号を作成する）も、稼動可能な本物である。それだけでも垂涎もの。「世界中のネットオークションで探したものの、300万くらいの値がついていたので諦めかけたところで、スタッフが国内で所有している方を見つけ出してくれた」ことで、実物に触れる機会を得た。「そのまま撮影に使うわけにはいかないので、一度分解してサイズを採り、つくり直そうとして、大のオトナたちが『これは国家機密だ！』とか何とか興奮しながら作業に没頭している姿を見て、当の所有者が『そんなにお好きなら使ってください』とおっしゃってくださった」。さらには、銃器も嘘がないように細部まで精確につくり上げ、陸軍中野学校（暗号が旧日本陸軍の財宝に関係することから劇中に少し登場する）に至っては、卒業生に接触するために膨大な資料と向き合い、多大なる時間を費やした。

もちろん、それは役者だって同じこと。「菊之助くんは、本物志向」と監督が感心するだけあって、彼は暗号冊子や探偵教科書を読み込み、ルービックキューブの練習も重ねた。「手元のアップはもちろんプロですが、随分と練習してくれました。僕なら一度バラバラにしたら二度と戻せないですよ（笑）」。

そこまで探偵に惚れ込んでいる監督。いっそのこと探偵業に転職しては？「『本業にしろ』と言われましたが、探偵は人を疑うことが仕事。人の暗部から目を逸らせない。やっぱり探偵にはロマンチシズムがないと」。先にも書いたが、監督の作品に登場する探偵は事件を解決していないことも多い。「依頼者の気持ちを緩和するのが僕の描く探偵。だから、時として依頼者に惹かれるという、一番のタブーを簡単に乗り越えてしまう（笑）」のも、愛すべき点のひとつだろう。



故郷だからの欲目ではなく 京都は暮らしやすい場所

19歳まで京都で生まれ育って、その後30年の東京暮らし。2年のアメリカ生活を経て、外国に住みたいという思いを強くした監督が、「50歳になって、晩年の準備をするときに、故郷だからではなく最も外国に近い都市を選んだ」、それが京都だった。ほどよい大きさ、新旧入り混じって何でもあって便利で、街の真ん中に大きな川。「さすが都があった場所だけあって、自然は多いし、食べ物も美味しくて、住んでる人たちもほどよく冷たくてラクなんですよ」。現在、自宅とバーと大学が一直線上にあり、「川を渡って煙草を1本吸うのが日課。いろんなものが見えて面白い」のだと言う。

大学で教えることになったとき、「教わったことのない人間に教える資格があるのか」と悩んだ。が、「全くの素人だったからこそ、一つひとつのプロセスを積み重ねてきて、大きなエネルギーさえあれば映画は誰にでもつくれることを教えられる」と、腹をくくった。「たったひとりになっても映画が撮れたら無敵。もちろん、みんなでつくった方が面白いけど、60歳を過ぎたら自分で勝手につくるだろうね」と、無邪気な笑顔。「あらゆるものに対応できる探偵という有効なカードで、観る人の願望を満たす夢のある嘘をつければいい」と、映画づくりについて締めくくった監督は、まさに、探偵に夢中だった頃の少年時代を思わせるような、夢に満ちた瞳をしていた。

その瞳は、彼が敬愛する人情に厚くて人間くさい探偵に似たものだった。

林 海象

京都市出身。'86年「夢みるように眠りたい」で監督デビュー。その後、一貫して「探偵映画」を撮り続け、劇場版とネット版をあわせて50本制作した「探偵事務所5シリーズ」では、監督・脚本・総合プロデューサーを務めている。世界探偵協会会員。京都造形芸術大学映像・舞台芸術学科教授。元田中にあるお酒と探偵を楽しむ店「BAR私立探偵」では自らカウンターに立つ。なお、昼間は喫茶営業も行っている。

Information

【上映情報】

「THE CODE／暗号」

©2008 THE CODE プロジェクト

■ 5.9（Sat）～ ■ 京都シネマ、シネ・リーブル梅田、シネ・リーブル神戸
■ 監督：林海象（『私立探偵 濱マイク』シリーズ）
■ 出演：尾上菊之助、稲森いずみ、松岡俊介、斎藤洋介、佐野史郎、貫地谷しほり、♠宍戸錠、松方弘樹、他
■ http://www.the-code.jp

【BAR私立探偵／喫茶 探偵】

京都市左京区田中里ノ内町26
☎075・334・5418
営18:00～24:00／日～水休（BAR）
9:00～18:00（モーニング～11:00）／日休（喫茶）
http://bartantei.blogspot.com/

デビュー10周年。「つじ」の恩返し。

The Real Face

取材・文／竹中　聡（本誌）　撮影／林川　淳

つじあやの

TSUJI AYANO

愛すべき、京都、母校、そして音楽シーンについて聞きました

日本を代表する、京都出身シンガーのインタビューではあるが、今回は特に新しい音源があるわけでもない。違和感はありますか？「ふふふ。大丈夫です」と、落ち着いて笑う。以前とは違う、良い意味で緊張していない感じが、デビュー10周年の余裕というものか。

3年ほど前のインタビューで、「好きなものを上からみっつ、お願いします」と聞くと、答えは「家、鴨川、あとはたくさん（笑）」だった。残念ながらそこに「母校」という答えはなかったが、取材後、「龍大の軽音サークルの先輩に連絡がとりたいんですけど、誰か知り合いにいらっしゃったら教えていただけませんか？」とわざわざ伝えに来てくれた。東京を拠点に活躍する今も、京都は必ず「帰る場所」であり、愛してやまない街である。

その街の昨年を振り返ると、音楽イベントが本当に多かった。全て今年も開催予定の10-FEETの「京都大作戦」、くるりの「京都音楽博覧会」、そして「KMF」という三大音フェスを筆頭に、大小様々なイベントが行われている。

「なんで京都フェスやったん？」なんて、敢えて喋らないけれど

三大音フェスは全て、京都出身のミュージシャンが、色んなお友達を連れて京都に帰ってきてくれた、ということだ。つじあやのは「京都大作戦」の出演者でもあり、その意味では当事者でもある。

「TAKUMAくんとか、岸田くんとかと、『なんで京都フェスやったん？』なんてことは、まぁ敢えて喋らないんですよ。私たち世代も近くて、私は龍大で岸田くんは立命で、TAKUMAくんは京都の大学じゃなかったけど、同じ時期に（京都で）ライブをやってるんですね。私と同じサークルに、TAKUMAくんをよく観に行ってた子もいたし。たぶん、この10年、みんなそれぞれ一所懸命がんばってきて、気がつくと京都が好きで、『何か恩返しせな』っていうのがあるんじゃないかなぁ、と。単に『ありがとう』っていうのもあるけど、ずっと（仕事を、もしくは音楽を）続けていきたいという熱い気持ちと、京都が好きやし、京都でやっていきたい気持ちがあると思うんです。それがちょうど今なんかなぁ、と。ある意味、ちょっと一段落っていうか、転換期ではあるのかなって」。ご自身も？「そうですね」。10-FEETがデビュー10年。「同期ですね（笑）」。くるりが11年目。確かに、だいたい同じ。

ライブ・CD、だけじゃないものをやりたい気持ちはあるなぁ

好きなことが出来るようになった、というと語弊があるかもしれないが、活動というものに関して、自由が利くようになったのはあるかもしれない。「好きな仕事だけを好き勝手に選べるという意味では、決してそんなことはないです。でも彼らはそうなのかな…、いや、彼らがどうかも分からないです（笑）」。そりゃまぁ、滅多なことは想像では言えませんが…。「でも、何となくそうじゃないかなぁ、と思うのは、自分が歌をつくって、ライブをして、レコーディングしてCDをつくって、っていうだ

けじゃないものをやりたい気持ちはあるのかなぁ、と。それは私もあります」。

今回、母校である龍谷大学への応援ソングをつくることになっている。それが、つじあやの的アプローチということなのだろう。まぁ確かに、「つじあやの主催、巨大京都音フェス」ってのは、ちょっと似合わないような気がするし、同じ気持ちを持っていても、それぞれのやり方がある。

大学に、京都という街に、シーンに「つじあやの」の、恩返し

「やっぱりどっかで恩返しがしたい、っていうのがあるんですよ。京都の音楽シーンに育てられたっていうのがすごくあって。特に大学時代に色んなライブハウスでライブやって、そこで色んな友達と出会ったり、デモテープ送ったり、っていうのと、もっと遡って中学、高校の頃は、ワークショップっていうのが京都には昔からいっぱいあって、学校跡地でイベントをやってたり、お寺でライブがあったり、私はそういうのによく参加していて、文化的な空気に育てられたんですね。そういう場所を与えられたことに感謝していて、それって京都じゃないとたぶん違うと思っていて。自分も同じように、文化的なものを与える存在になりたいなって。それが彼らの場合、でかいフェスなのかなって。それは10年やってきて思えたことで、デビューして5年とかでは思わなかったことだろうし」。まぁ、デビュー直後ではそんな余裕もないだろう…。「そうそうそう。ないないない(笑)」。

良し悪しではないが、10年経って振り返って、迷う人だっている。だがそうではなく、10年余を三者が振り返って、同時に「故郷」を思ったのは奇跡か必然か。そもそも、耳に入る音源から考えたら、「つじあやの」と「10-FEET」が仲間というのはおかしい気もする。「おかしいですよね、ホントに(笑)。昔は全然知らなかったし。通ったライブハウスも違ったし。10-FEETは『ウーピーズ』、私は行かなかったなぁ。私はもぅ『磔磔』とか(笑)」。

京都の狭さが、逆に広くなってそれは寂しいことかもしれないから

デビュー10周年、α-stationで久しぶりのDJ…。側面は色々あるのだが、今年、彼女に与えられた役目は「龍谷大学のスポークスマン」である。

「370周年を記念する歌をつくってください、ということで、『LIVE IN CLOVER 2009』という番組で、リスナーさんから毎月テーマを決めて、その言葉を送ってもらって、それをもとに曲をつくっていく、と」。なかなか、壮大な感じである。「そうなんですよー。今までやったことがないんで」。

今の、音楽が大好きな学生、音楽を取っ払った学生に伝えたいこと、というかここが可哀想、と思うことなんかはあるのだろうか。ちなみに今の学生も、ときどき自転車を持っていかれてしまっている…。

「今の学生さん、全然わからへんしなぁ(笑)。たぶん、私のときと違うのは、圧倒的に携帯電話とネットがすごいってことだと思うんで。それは今の自分にとっても大事だし、ホンマにないと困るし、『待ち合わせってどうしてたんかなぁ?』って思うぐらい、ないと不便なんですけど、あることで、ね、京都の狭さが逆に広くなってしまっていたら、それは寂しいことなのかなって思ったりして。『足で(情報を)かせぐ』ってことは、私も大学の頃はやってたことやし」。

ウザいかもしれないけど(笑)一日を大事にして、と言いたい

どんな歌になるか、今はまだ真っ白だろうが、春に出会いがあり、夏に最高潮を迎えて、秋を越え、晩秋に「フッ」と落ちる(落ち着く)、その頃が最も好きな季節だという。番組が9月いっぱい続き、曲ができあがるのは、おそらくその晩秋の頃だろう。

「そう。それ(晩秋の頃)を感じてるからこそやりたいのかもしれないですね。単純に学校とかライブハウスとかシーンとかと離れちゃってるし、今までとは曲のテーマも違うし、ラブソングでもないし…。ただ、大学の頃って、今振り返ったら『あ〜いい時間やったなぁ』って思うけど、いくら『恵まれてるねんで』って言われてもそのときは分からないだろうし、私も当時は思わなかったし、言ってもしょうがないな、って思うんですけどぉ、だけどぉっ、でもぉっ(笑)、やっぱり一日一日を大事にして欲しいなぁ、っていう気持ちがあって、歌に込めたいなって思うんです」。お姉さんのお説教になってしまうかもしれない。「そう(笑)。ナンボ言うても、こんなこと言われてもウザいかもしれないけど(笑)」。

京都純度が高い歌ができる'09年の晩秋をお楽しみに

幼いというのでも、若いというのでもなく、こんなに純度が高い(音楽的にも京都好き的にも)人も珍しい。特に学生諸君、心配はいらない。彼女はそんじょそこらの先輩とは違うから、きっと大丈夫。彼女の歌は「お姉さんのお説教」ではなく、寄り道せずに、高い純度で心に届くはずである。

デビューして10周年という節目に、「今年1年は、京都に頻繁にいようかな、って思ってます。ホンマに、そのあたりをプラプラしてるかも(笑)」という予定はラッキーであるし、毎週地元FM局で彼女の声を、身近に聞けるのも幸せなことである。

くり返すが、ここ20年、京都でこれだけのサイズの、これだけの数の音楽イベントがあったことはないだろう。「家や鴨川が大好き」なつじあやの。FPMや10-FEETやくるりのでかい京都音フェス。今の京都が、何らかの「帰属意識」みたいなもので豊かな音楽シーンを形成しているのは間違いない。

つじあやのが最も好きな晩秋の頃には、「京都大作戦」も「KMF」も「京都音楽博覧会」も終わっている。そして'09にトドメを刺すように、できあがった龍大応援ソングが街に流れる頃、また少し、京都が豊かになっているはずだ。

Information

α-station (FM89.4)
Ryukoku University Presents
LIVE IN CLOVER 2009
毎週金曜日　15:00〜16:00

実はデビュー前から約3年担当していた番組で、2009リバイバルプログラム。学生時代の思い出、デビューまでの過程、デビュー10年の軌跡などを、お馴染みの「ほよん」とした声と雰囲気でオンエア中。

つじあやの

'78年、京都市生まれ。銅駝高校〜龍谷大学卒業。フォークソング部、軽音楽サークルに所属し、'98年インディーズレーベルよりサンプラーカセット「悲しみの風」をリリース、翌'99年、「君への気持ち」でメジャーデビュー。ちなみに生涯の相棒ウクレレとの出会いは、高校時代のどこにでもある楽器店。今年、メジャーデビュー10周年を迎える。昨年の京都大作戦にも出演し、本文中にある「京都音楽シーン」のど真ん中にいる当事者のひとり。「京都系」とかではなく、実家や鴨川や自転車や…、京都の全てが大好きな、「京都の人」で、ウクレレ弾きのシンガーソングライター。
http://www.tsujiayano.com/